

第10回「日本語大賞」

テーマ「忘れられない言葉」

中学生の部 優秀賞 受賞作品

「心のある言葉」

アメリカ

グアム日本人学校

中学1年 権田 あい子

特定非営利活動法人 日本語検定委員会

夏休みの始まり、気分は最悪だった。一学期最後の体育の授業で転んで左腕を骨折してしまった。中学生になって初めての夏休み。普段グアムで暮らす私にとって、日本で過ごす夏休みは格別なものだ。特に今年の夏休みはグアムの友達と東京で会う約束をしていた。日本の中学生と同じように、行きたい場所や食べたいものを選んでいたのに、その計画は空想だけで終わってしまった。私だけ……。誰も悪くない事はよくわかっていたが、やりきれない気持ちでいっぱいだった。

結局、日本での夏休みは、毎日の通院が日課となった。リハビリを兼ねての通院で半日はそれでつぶれてしまう。おまけに今年の夏は異常気象と言われるほどの猛暑。本当についてない。楽しい事など一つもないとふてくされるばかりだった。

そんなつまらない通院を続ける中で、毎日聞こえてくる、ある言葉に興味を持った。

「お大事にどうぞ」

病院のスタッフが、患者さん一人一人に丁寧にかけている言葉だ。「お大事にどうぞ」の言葉の裏には、患者さんの回復を願っている事と、その他たくさんの気持ちが含まれているように思えた。

「早く良くなってね。」

「無理しないでね。」

「気をつけて帰ってね。」

などなど……。日本人らしいさりげない優しさ。出しやばらない気遣い。そっと伝える親切心。やわらかい響き。いかにも日本ぽいなと思いつながら「お大事にどうぞ」は英語で何て言うんだろうと辞書で調べてみた。「きつとこう言うのだろう」という英訳はいくつもあつたがどれもしっくりこない気がした。それは私が日本人だから英語の奥の奥の意味までくみとれなくてそう感じただけかもしれないが、心のこもった「お大事にどうぞ」を伝えるためには、日本語であることが必須条件であるようにすら思えた。

この夏休みの間、いったい何人の人に「お大事に」と言ってもらったのだろう。学校の先生や友達。病院で顔なじみになったおばさん達。飛行機の中でお世話になったキャビンアテンダントの人。百貨店の店員さんなど、みんな私の事を思ってくれた言葉だと思うといつのまにかこちらまで優しい気持ちになる。「ありがとう」と心をこめて言いたくなる。みんなの心のこもった「お大事に」が私の心に伝わり、私にも誰かを気遣う心の余裕ができて優しさの伝染となる。「お大事に」という奥の深い言葉にふれて、心が晴れた気分になった。「心のある言葉」、それを人に伝えることによって、こんなふうに心の重さを変えることに気付くことができた。言葉をかけてもらううれしき、心強さを知る事ができた。

優しい言葉が持っているすごいパワーを今度は言葉をかける側になって、誰かの心に伝えたい。さりげなく、そして心をこめて。